

LaTeX による電子化出版の試行に際して

坂 和 磨†

本特集号は、情報処理学会による初めての試みとして、掲載論文6編を対象に製作工程に LaTeX を使用した電子化を試行することにより出版されました。この情報処理学会にとってエポックメイキングな電子化出版の試行に当たり、ここに至るまでの、情報処理学会の取組みの経緯および関係された方々のご尽力、ご労苦の一端を紹介させていただきます。

ご承知のとおり、学会活動は各種の大量の情報を取り扱うことによって成り立っています。したがって、情報処理学会の活性化の大きな手だてとして、情報処理技術の活用により情報の取扱いを電子化して効率化するとともに拡大することが挙げられます。

このため、まず平成2年度に情報処理学会内に電子化検討小委員会が配置され、電子化に関する世の中の動向を調査するとともに、電子化の方向付けと次年度以降の検討素材が報告されました。

平成3年度からは電子化小委員会として電子化のための活動を継続することとなり、出版物の製作工程の電子化に優先度をおき、論文誌印刷の LaTeX 化からスタートする試行案がまとめられました。

平成4年度はこの試行案に沿って、掲載済みの論文3編をサンプルとして情報処理学会論文誌用の LaTeX スタイル・ファイルの原版作成と仕上がりの評価、および現行での出版費用と、LaTeX 化時の出版費用との比較評価も行われました。

これにより、論文誌の LaTeX 化のおおよその目処を立てることができ、特集号で試行することが望ましいとして提言されました。これを受けて平成5年度には論文誌編集委員会においても検討が進められた結果、本特集号での試行が決定され、ここに出版の運びとなりました。

論文誌の LaTeX 化に際しては、まずスタイル・ファイルの原版作成が大きなテーマでした。

これについては、すでに5年前から英文論文誌、2年前から日本語の学会(論文)誌の編集・製作・出版に

LaTeX の使用を開始し、ほぼすべての原稿を LaTeX によって処理するという経験と実績をお持ちである日本ソフトウェア科学会のご好意により、日本ソフトウェア科学会の学会誌に使用されているスタイル・ファイルを参考にさせていただいた上で、情報処理学会論文誌の版面に合わせたスタイル・ファイルの原版を作り上げました。

学会を越えて広く学界に貢献してゆくというお考えのもとに、快くご協力をいただいた日本ソフトウェア科学会に厚く御礼を申し上げます。

一方、情報処理学会論文誌用のスタイル・ファイルの原版作成、および本特集号での試行のためにスタイル・ファイルの完成度を高めることでは、次の方々に格別のご尽力をいただきました。

齊藤 康己 NTT 基礎研究所

中島 浩 京都大学工学部

さらに、本特集号での試行に際して、次の著者の方々にご協力をいただきました。

林 憲一 (株)富士通研究所

柴村 英智 九州工業大学情報工学部

松田 秀雄 神戸大学工学部

高橋 英一 九州大学大学院総合理工学研究科

佐藤 三久 電子技術総合研究所

岡本 雅巳 早稲田大学理工学部

また、お名前は挙げませんが、ここに至るまでには多くの関係者の方々のご尽力、ご労苦が積み重ねられています。

これらのすべての方々に厚く御礼を申し上げます。

今後、情報処理学会では、本特集号による LaTeX を用いた電子化の試行結果を評価した上で、論文誌の全面的 LaTeX 化の時期について検討してゆくこととなります。会員の方々からも、本特集号での試行結果を評価いただき、ご意見をお寄せください。

なお、本特集号での試行経験の情報は、今後同様の計画を検討されている他学会のお役に立ち得るようにしたいと考えています。

† 三菱電機(株)情報システム本部